【資料紹介】

東亜同文書院関係者よりの受入れ資料
—当時の写真と大学史編さん—

東亜同文書院大学記念センター資料整理　**佃 隆一郎**

はじめに

2021 年度より目録作成作業が（私の担当で）再開された、本東亜同文書院大学記念センターへの寄贈資料について、前号では東亜同文書院（以下原則「同文書院」）の卒業生ご遺族ほかより寄贈された分のなかでも、歴史的史料としての価値が高いと思われる軍人・小山秋作（荒尾精、根津一と陸軍教導団時代から交流）の、日露戦争期を中心とした書簡の概要を紹介した。多数遺されているこれら書簡の吟味を、今後さらに進めねばなるまいが、同時期に確認した卒業生、遠藤保雄（１期）・進（28 期）氏父子（進氏は本来甥で、のち養子になったもよう）のご遺族から贈られた資料[1]にも、注目していたところである。

なぜなら、親子二代の卒業生、および保雄氏が１期生であることのみならず、それら資料には保雄氏が同文書院卒業前後の 20 世紀初頭（明治 30 年代末）に足を踏み入れた、旧満州の大連・奉天（現瀋陽）をはじめとする当時の中国各地の写真が、関係者の肖像や同文書院初代校舎の門のものともども相当数遺されていることや、進氏が戦後、1982（昭和 57）年に滬友会によって刊行された『東亜同文書院大学史—創立八十周年記念誌—』の編さんに関わっていたことを示すもの（編さん記録）が、やはり多数含まれているからである。

そこで今回は、保雄氏関連の写真および、進氏関連の記録の、それぞれの概要を紹介することで、創立当時の同文書院を取り巻く状況と、同文書院大学史編さんのために努力した方々の軌跡を示す一助としたい。

構成としては、「遠藤保雄・進氏関連資料」の目録については、本文に続いて掲載し、さらに写真のうち、撮影場所および人物が確定できるものを掲載する。本文中の記述に関連する資料については、逐次目録の番号を注記する。

（歴史的な公人と思われる方の敬称は略しました）

Ⅰ　遠藤保雄氏保管の各種写真

これら資料は保管形態を基準に、計 23 種で分類したが、実際はそこから細かく枝分かれしているものが多く、総点数でいえば 150 を超えている。うち遠藤保雄氏が保管し

[1] これら資料は 2019 年７月に進氏のご子息・保徳氏より受領したが、本記念センターに寄贈された経緯としては、同年１月に保徳氏の母親が他界されての遺品整理中、父親・進氏の「大陸旅行の報告書」（それ自体は私は未確認）などとともに、保雄氏の「従軍当時と思われる」中国関連の写真が出てきたことで、「東亜同文書院の研究材料となれば幸いです」とのご意思から贈られたものである（資料同封の挨拶文より）。改めて謝意を表します。

ていた写真は 100 点近くになるが、大部分は封筒にひとまとめになっていたことから、目録№14 に集中することになり、その分の明細を目録に続けて掲載する。

遠藤保雄氏は東亜同文書院政治科に在学し、日露開戦直後の 1904（明治 37）年４月にほかの１期生とともに卒業し、その時の集合写真（№2。後掲）がまず遺されている。卒業後すぐに主計（会計・給与等の担当）として日露戦争に従軍したとのことであり[2]、大連の風景が撮影された一連のものでは、ロシア兵と思われる捕虜が乗船させられている光景のもの（№14-13。後掲）もある。

しかし時期の主体としては、写真裏の書込みにある年月日から、日露戦終結後の 1905（明治 38）年後半以降のもので構成されているようである。その一枚に「明治三十八年十一月我軍占領地ヲ遊歴」（№14-51。後掲）と書かれているように、「戦勝後の祝い」としての撮影であった面は否定できまいが、そこに写っている、当時の清朝支配下の庶民の各種情景には興味が持たれる。

写真への添付や書込みから確認できる撮影地点は、大連に奉天（現 瀋陽）や旅順といった、日露戦争の現場となった旧満州地域のほか、「大理」と記されている一連のものがあり、かつて中国西南部にその名の国があったことから、（「諸葛孔明」の記述もあり）同地域にあたる雲南省西北部の都市と思われる。また、東亜同文書院の初代校舎である桂墅里（クイシュリ）校舎の門を撮影したものが１枚ある（№14-40。後掲）ことにも注目されるが、在学時か卒業後の訪問かで意味は変わってこよう（書き込みはナシ）。

全体的に、撮影地点がわかる分は大連と奉天で大多数占められているが、前者は市街地の各施設・建物、後者は清朝発祥期からの宮殿・陵墓の風景からほぼなっている。大連のからは街の活気もある程度見いだせる一方、奉天のからは清朝がいまだ存在していたはずの時期に、それら建物がどのような状態で存在していたのかという点からとりわけ注目したい。

なお、写真全体には中国人（と）の記念写真も相当含まれていて、遠藤保雄氏が写っているとされるもの（№14-88）もあるが、肖像関連の写真の掲載は、今回はあえて見送ることにした。ご了承されたい。

Ⅱ 遠藤進氏による編さん記録

全 23 種の各資料中、先の№14 を除くほとんどをこちらが占めている。

1982 年刊行の『東亜同文書院大学史』は、55 年刊行の同名の年史を底本としたものであるが、内容は大幅に加筆訂正されている[3]。70 年代後半（昭和で言えば 50 年代前半）に、滬友会の正式事業として再編さんの事務が始動、具体化し、77 年 11 月には大学史編さん委員会が設置され、編集の正副委員長らが刊行部門ともども委嘱されたが、提出済み原稿の総合調整に入った段階の 80 年春に、両委員長が相次いで病に倒れ、同会

[2] 同前挨拶文より。保徳氏は寄贈時滋賀県に在住。また、保雄氏はその後、東亜同文書院の学生監を務めたことで、20 期生あたりからの後輩から親しまれていたようであり、36 期の西村敏雄氏は進氏の実弟にあたる「書院一家」（『東亜同文書院大学史』528 ページ）であった。

[3] 『東亜同文書院大学史』冒頭の凡例では、前書を底本とした上で「別掲主要参考資料によって補足し、また、多数の同窓から寄せられた資料・記録を整理按配して編集した」としている。（ページ表記ナシ）

理事で編さん委員だった遠藤進氏が急きょ正委員長に就任した[4]。

ここでの資料はその１年少し前の、79 年初めからのものからまとまった形になっているが、この時点は大内暢三（大学昇格当時の学長。ファッション評論家の大内順子氏の祖父[5]）に関連したものが多く、編さん委員として大内を担当していたのであろう。その際元写真から再撮影した、大内写真もネガともども４種遺されていて[6]、大内以外を含めて収集した各方面の資料・文献のコピーも多数ある。

正委員長に就任してから（1980~82 年）の資料は、編集委員会で使用されたもののほか、同委員長を病気のため辞任して療養していた蔵居良造氏（28 期。回復後復帰）をはじめとする関係者との、編集方針をめぐる書簡のやり取りにも注目される。情報・資料・文献の提供も、委員会内外の複数人からのものがあり、島根県大田市の本田正造氏からのには、山田純三郎（本記念センターに最初に、孫文や実兄らを含めた関連資料が贈られた）についての言及が見られ、純三郎実子の順造氏（38 期。逝去直前に資料の愛知大学への寄贈を承諾）からの書簡も別に、79 年の段階のものとしてある。

『東亜同文書院大学史』が上梓されてからのものでは、大内順子氏をはじめとする各関係者から寄せられた感想が相当数あるが、宛先は滬友会でなく進氏自宅（兵庫県西宮市）になっている。総じて編さん資料としては、進氏が控として用意したものや下書きで占められていて、書簡は私的なものとしてそのまま留め置かれたのであろう（ただし、進氏が出したであろう返信の控は含まれていない）。

むすび

日露戦争期の書簡に続き、遠藤保雄氏が孫の代まで保管してこられたことで、さらに同時期の写真も相当数確認することができたが、むろんそれで即体系的な書論を構築できるということではない。しかし今後の各人の関連研究に際しての、参考資料として少しでも活用されれば幸いである。

また、遠藤進氏らにより編さんされた『東亜同文書院大学史』刊行から、すでに 40 年の月日が経過しているが、同文書院卒業生のほとんどが鬼籍に入（い）られた今、愛知大学が将来の年史編さんに同文書院をも取り込む形になるかが問われてこようが、今回呈示する編さん記録が何らかの形で、日の目を見ることができるよう念じたい。

（現在―2022 年度末―における同文書院関係者寄贈資料の整理としては、鳥取県在住の卒業生ご遺族から贈られた、中国関連の各種文献の目録化に取り組んでいます）

---

[4] 同前書 774~775 ページ「編集後記」より。執筆者は今回の資料にも名がある藤岡瑛氏（33 期。編さん委員会では事務担当）。

[5] 大内順子氏の父、すなわち暢三の息子にあたる義郎氏が、愛知大学創立時に予科教員として着任したことから、順子氏（2014 年没）は豊橋市の高校を卒業している。

[6] 大内暢三については『東亜同文書院大学史』255~257 ページで「略伝」として紹介され、進氏が執筆されたであろうが、掲載写真は学長時代のものと思われ、今回のものではない。同書での進氏の記名記事には、688~691 ページに「漢口戦犯拘留記」としてあり、本人が 1946 年 6 月の引揚げ予定直前に戦犯として拘引され、翌年無罪となって帰国するまでの一部始終が述べられている（№17 参照）。

【遠藤保雄・進氏資料目録】（箱に収納されていた順）

№	形態	表題　―便宜上新字体で表記、以下同―（カッコは内容・注）	年月日	差出人〔作成・編著者 〕	宛先〔発行元〕	備考・記事
1	写真・ネガ　（袋入り）	大内（暢三）先生の写真四枚（現物）同　ネガ		〔遠藤進〕		写真店の袋に在中。「大内先生 photos」とも記
-1	写真	（青年期のツーショット）				相手は不明。ケンブリッジでの撮影
-2	写真	（青年期のツーショット）				相手・撮影場所不明
-3	写真	（家族との集合写真）				両親や姉婿ら計８名
-4	写真	ヨーロッパ旅行途次				近衛「霞山公」ら計３名
-5	写真（封筒入り）	大内暢三先生略伝（に使用するためのもの計６点）		社団法人滬友会		1-1,3,4 から２点ずつ複写。三校用のもの
-6	ネガ	（1-1-5 のもの）		松村カメラ	遠藤	福岡市の写真店
2	集合写真	呈学兄遠藤保雄君 明治三十七年四月/東亜同文書院政治科一同				台紙付き。港での撮影か
3	封筒	◎大学史編集関係 書簡（計 17 点在中）		〔遠藤進〕		北京「中国国際書店」封筒（中身の資料とは無関係と思われる）

-1	原稿コピー綴	付録 山洲年譜（略―原文―）	昭和55.6.10	藤岡		「メモ用として作成した」とのこと
-2	原稿コピー綴	端渓名硯 広東肇慶市工芸廠	昭和55.1.23	岩田		「岩田君の訳」と遠藤氏が添記
-3	書簡・原稿コピー綴	大学史編纂を顧みて	昭和57.8.13	〔志波正男〕（差出とも）	西宮市遠藤進	書簡は挨拶文。コピーは本文（編集後記）原稿か。 （いずれも「東亜同文書院大学史原稿用紙」を使用。同じものは以下※印を記）
-4	封筒・書簡綴	（編集方針への意見）	昭和56.12.14	霞山会蔵居良造	西宮市遠藤進	15 日来信、16 日返信したと添記。封筒・便箋とも霞山会のものを使用
-5	封筒・書簡綴	（委員会への意見）	昭和56.9.24	逗子市蔵居良造	西宮市遠藤進	返信としてのもの。霞山会の便箋を使用
-6	封筒・書簡綴	（情報の提供）	昭和56.8.26	大田市本田祥三	西宮市遠藤進	28 日来信、9 月 1 日返信したと添記。 山田純三郎に言及
-7	封筒・書簡綴	（志波氏原稿への感想・意見）	昭和56.5.19	霞山会蔵居良造	遠藤進	「56.5.21(27)」と添記。手渡ししたもよう
-8	書簡綴	（編集方針の報告）	昭和56.6.4	志波	遠藤進	
-9	封筒・書簡綴	（遠藤氏原稿への感想・意見）	昭和56.4.9	逗子市蔵居良造	西宮市遠藤進	本文の日付は 10 日。10 日来信、13 日返信したと添記があることから、作成・発送は封筒と同じ 9 日と思われる。
-10	封筒・書簡綴	（原稿提出の報告）	昭和56.3.5	逗子市蔵居良造	西宮市遠藤進	7 日来信、9 日返信したと添記
-11	封筒・書簡綴	（編集方針への意見）	昭和56.2.11	逗子市蔵居良造	西宮市遠藤進	13 日来信と添記。蔵居氏はしばらく病気療養していたとのこと
-12	書類・メモ	（編纂委員会での資料ほか）	昭和 56 年	遠藤進		チラシに折り込む形でひとまとめに。 委員会はこの年には少なくとも５回開かれていたもよう

-13	書簡	（資料・文献の提供）	昭和 55 年	大学史編纂委員会 藤岡瑛（うち１点はサイン）	遠藤進	5.21（鉛筆書き）、同日、8.4、10.13 日付の計４通を、ひとまとめに折ったもの。　「滬友ニュース原稿用紙」を使用（下も）
-14	書簡	（資料・文献の提供）	昭和 55.10	藤岡瑛	遠藤進	上に続き、10.22、24 日付の計２通をひとまとめに折ったもの。 いずれも受け取った日付を添記
-15	封筒・書簡・各種コピー綴	（情報の提供）	昭和 57.8.18	西宮市 佐藤泰司	西宮市 遠藤進	20 日来信と添記。『東亜同文書院大学史』への感想を記した、卒業生でない人２名から佐藤氏への書簡・はがきのコピーも（プロフィール書込み）
-16	書簡・はがき綴	（『東亜同文書院大学史』への各感想）	昭和 57.6	東京都港区 大内順子 ほか計９名	西宮市 遠藤進	同月中に遠藤氏の自宅に来たものを綴じたと思われるが、同一の人から２度来たものもあるため、トータルでは 11 通に
-17	草稿	根津一（略歴）		〔遠藤進〕		「南京同文書院創立」まで
4	メモ折込み	（各年の卒業生関連計４点）		〔遠藤進〕		草稿・チラシの裏を使用し、ひとまとめに
5	コピー折込み	明治 37 年３月１日 （原文漢数字。計３点）	①明治 37.3.3 ②③明治 37.3.4			メモ付き（メモの表題と日付に相違があるのは、選挙の投票日と開票結果の新聞掲載日とのタイムラグのため。以下同）。『福岡日日新聞』コピー
6	コピー折込み	（①福岡日日新聞 ②九州日報）	①②明治 41.5.18			前後のいずれも、マイクロフィルムからのコピーと思われる
7	コピー綴	大正 13 年５月 10 日 （計３点）	①大正 13.5.12 ②③大正 13.5.13			メモ付き。②③は『福岡日日新聞』コピーで、③には大内暢三の写真が掲載

8	コピー綴	明治 45 年５月 15 日 第 11 回（計２点）	①明治 45.5.18 ②明治 45.5.17			メモ付き。いずれも『福岡日日新聞』コピーで、②に大内暢三の写真が掲載。「第 11 回」は衆議院議員選挙の回数と思われる
9	コピー綴	大正４・３・25 第 12 回（計２点）	①大正 4.3.28 ②大正 4.3.27			メモ付き。いずれも『福岡日日新聞』コピー。 各メモには「（当）（落）」と選挙での大内の結果も記（ここは「（落）」）
10	コピー綴	大正６年４月 20 日（計２点）	①大正 6.4.22 ②大正 6.4.23			メモ付き。新聞名は記載ナシ（『福岡日日新聞』？）
11	コピー綴	大正９年５月 10 日（計２点）	①大正 6.5.12 ②大正 6.5.13			同上
12	コピー綴	昭和５年 ２月 20 日	昭和 5.2.23			同上
13	コピー綴	昭和３年 ２月 20 日	昭和 3.2.23			同上
14	封筒	（写真とメダル。計 89 点在中）				
-1~88	写真	（**「明細」参照**：計 88 点）	20 世紀初頭		（-71～84）上海福州路 合信洋行 遠藤保雄	遠藤保雄氏が収集し、進氏が保管していたもよう。-71～84 は封筒に在中（中の写真との関連性は不明）
-89	メダル	JUDO	昭和 2.3	東亜同文書院柔道部	遠藤（進）	裏側に「敬贈遠藤君…（差出、年月）」と浮彫り （「遠藤」の箇所は刻印）

15	封筒・原稿・資料綴	目次 西舞鶴高（計２点）	昭和 53～62 年	〔遠藤進〕		封筒内は一部厚紙で折り込んであり、外を-15-1、中を-15-2（大旅行の資料もアリ）として分類。封筒は「中国国際図書貿易総公司」のもの（-17 も。これも無関係か）
16	コピー綴	対支文化事業関係史―官制上より見たる―	昭和 54.2.14 受贈	〔河村一夫〕坪上正	（遠藤進）	『歴史教育』昭和 42 年８月号のもの。末尾にメモ綴込み。坪上氏は 34 期
17	封筒・原稿綴	抑留記（計３点）	昭和 55 年（書簡は同年 4.11）	〔遠藤進〕藤岡瑛	遠藤（進）	内容が別々の原稿２編１綴ずつ（うち１編の最初に藤岡氏からの書簡綴込み）と、メモ１点。書簡付の原稿「漢口戦犯拘留の思い出」は『東亜同文書院大学史』に「漢口戦犯拘留記」として大部分収録
18	封筒	◎大内関係資料 ○附、安斉（斎）氏の書翰　（計５点在中）		日本銀行	遠藤進	中身の資料とは、無関係と思われる（以下、№20 まで同一封筒）
-1	コピー・書簡綴	上海在留日本人座談会 十月六日午後五時、於上海日本人倶楽部	昭和 54.2.19 受贈	山田順造	遠藤（進）	『改造』昭和 11 年 11 月号のもので、大内暢三のほか山田純三郎も出席。 末尾に純三郎実子の順造氏からの書簡（同月 15 日付）綴込み
-2	書簡綴	（２通１綴）	①昭和 54.1.17 ②昭和 54.1.26	①佐藤泰幸 ②津巻龍男〕	遠藤進	いずれも大内暢三やその子孫の情報を記。②は開いた封筒も綴込み

-3	コピー・書簡・機関紙綴	（５点１綴） ②「実録・満鉄調査部」の著者草柳氏と出版元である朝日新聞社にたいする質問と抗ギ ⑤『プロレタリア』第 113 号	①昭和 55.5.23 消印 ③昭和 55.5.9 ④昭和 55.7.10 消印 ⑤ 1980.5.25	①②④安斎庫治 ③草柳大蔵、朝日新聞社出版局中村豊 〔⑤安斎庫治（発行人）〕	①④遠藤進 ③安斎庫治 ⑤労農通信社	封筒記載の〇印にあたり、①④は書簡（封筒付）、②は活字印刷の質問書（一部書込み）、③はそれに対する回答書のコピー、⑤は進氏の「追憶」への意見として記した④の同封参考資料。②での抗議は全面的に受け入れられたもよう
-4	大学ノート	（清書用か）		〔遠藤進〕		「◎大内暢三先生略年譜」などを記載。書店カバー付
-5	書簡等各種資料折込み	（多数。うち書簡・寄稿５点） ⑤大内暢三先生の思い出	①昭和 55.6.4 ②昭和 55.6.6 消印 ③昭和 55.12.10 ④昭和 54.11.24 ⑤昭和 54.10.29	久保田重男 ②大内順子 ③日置栄子 ④蔵居良造 ⑤野間口英喜	遠藤進	チラシの裏を使用し、ひとまとめに。 中身は多彩で、草稿、メモや新聞切抜きのほか、大内家の戸籍謄本や家系図のコピーなども。書簡の①～③は、『滬友』寄稿への反響
19	封筒・原稿綴	◎第三編 当初原稿（不要―原文―） （計６綴）		〔遠藤進〕		表題「不要」の傍線の先に矢印で「価値あり」と添記
20	封筒・原稿綴	◎大内院長略伝原稿	昭和 54.10.30 脱稿	〔遠藤進〕		本文タイトルは「大内先生略伝（覚書）」
21	封筒	（表題は以下記載。計４点在中）		中国国際書店	遠藤進	№３と同一

-1	原稿綴	◎目次、凡例 編集後記　◎序文		〔田中香苗・遠藤進〕		「序にかえて"田中会長最初の原稿"」（コピー）を含め、実際はひと綴
-2	原稿綴	◎荒尾精余聞 研究所余聞（計２綴）		〔遠藤進ほか〕		本文タイトルはそれぞれ「荒尾精余聞―強兵よりは富国が好き」「研究所余聞―日清戦争に通訳従軍」で、いずれも遠藤氏以外の人の筆による原稿コピーを綴込み
-3	コピー綴	◎東亜同文会と東亜同文書院 大森史子 東亜時論 小島麗逸（計２綴）	（いずれも）1978 年	〔大森史子・加藤祐三〕		大森氏の論文（『アジア経済』1978 年６月号）に書込み多し。小島氏の書（同氏編『戦前の中国時論誌研究』アジア経済研究所）は実際は、加藤氏担当の「第I章『東亜時論』（1898.12~1899.12）」にあたる
-4	用紙	アンケート（封筒には記載なし。計２部）			（返送）滬友会本部事務局	東亜同文書院大学史の第４編「滬友回想録」作成のために、各期で執筆者を選定するための履歴等の調査（実際は第５編第１章に）。いずれも未記入
22	リールテープ	"遥かなる上海"関西在住者の録音テープ	昭和46.2.5 開催			原題「上海回顧座談会」。大阪銀行倶楽部にて、進氏ほか計５名出席。「（平成）3.8.21 封」として、封筒の一部を貼付
23	カセットテープ	東亜同文書院大学寮歌（計２部）		〔滬友会〕		全 12 曲

【№14 写真の明細】

№ 14-	被写体	表題・添記文（便宜上新字体で表記。以下同）	台紙付	備考・内容
1	人物	呈 遠藤仁兄 誠	○	上海「井上相照館」の印アリ
2	人物	呈 遠藤仁兄 明治三十七年四月 高島大次郎	○	同上
3	人物		○	「楊氏…」の印鑑アリ
4	人物		○	「王文藻」と印字
5	風景	大連西高鞏？馬市場ノ景		
6	風景	大連大桟橋		
7	風景	大連大山通		
8	風景	大連日本橋ヨリ乃木町ヲ望ム		
9	建物	大連通信局 司令部・郵便局		
10	風景			大連の坂道？
11	建物	大連海軍防備隊		司令部
12	建物	大連旧劇場		
13	風景	大連大桟橋捕虜乗船の景		ロシア兵捕虜？
14	風景	大連海軍ドック		船上の小屋に「大日本」の記が
15	風景	大連伊賀町		
16	風景	32.CHAN`S GARDEN		
17	風景	奉天北陵之景 三		表題ともども裏に「明治三十八年十一月我軍占領地ヲ遊歴ノ時 同行中村主計之ヲ写ス」と記
18	風景			桟橋と停泊船
19	風景			街角（日章旗を掲げた家屋も）
20	風景			街の俯瞰
21	建物	奉天宮殿 三		裏に記
22	風景			日本兵の一団と中国人少女ら
23	風景			広場から見た街並み
24	風景			家屋の前に立つ人（この家の中国人？）
25	団体			裏に「明治三十八年六月 野戦重砲兵第二聯隊第一大隊 騎乗演習ノ際清国奉天省福陵ニ於テ」との記があり、さらに「道路中央ハ拙者ナリ」と
26	団体			門の前にて（上と同じ時？）
27	人物			中国服の婦人

28	風景			門の前に立つ日本兵
29	風景			馬車と中国人
30	風景			集落の出入口の門（兵士の姿も）
31	風景	大理城内五華楼		裏に記。さらに「…諸葛孔明陣此云」と（路上を歩く子供がアップ）
32	風景	大理府北門外 従三塔寺望蒼山		裏に記。さらに「…出大理石白是□」と
33	風景	大理府東門外　□海之畔 愛？楽亭		裏に記
34	建物	開原溝河ノ鉄橋		裏に記。崩落箇所アリ
35	風景	三塊石山古戦場		裏に記
36	風景			市場のにぎわい（俯瞰）
37	風景			楼門と馬車
38	風景			楼門とそばに立つロシア兵
39	建物	三塊石山上之廟		巨大な土の塊も（三塊石の由来？）
40	建物			東亜同文書院クイシュリ校舎の門（人や馬も）
41	風景			クリークと納屋（上海郊外？）
42	風景			露店の中国人（弁髪ではない様子）
43	風景	奉天小西門外皇寺		門と樹木がアップ
44	風景	奉天北陵第二門		門の前が主体
45	風景	奉天北陵之景 二		裏に記
46	風景			楼門近くの街角（商店の品書が日本語）
47	風景			楼門近くの街角（兵士らしき姿も）
48	風景			楼門近くの街角（半分ほど陰に）
49	建物	奉天宮殿 二		裏に記
50	風景	奉天北陵之景 四		裏に記
51	風景	奉天北陵之景 三		表題ともども裏に「明治三十八年十一月遊歴我軍占領地之時 同行陸軍二等主計中村寅吉写之」と記
52	建物	奉天宮殿 一		裏に記
53	風景			通りと馬車
54	人物	海龍経歴劉建封氏之一子 同姓寿籛十九年		表題ともども裏に「明治三十九年九月二十四日于清国盛京省海龍府署一隅」と記
55	人物	明治三十九年十一月十八日 於東門外中和謙後庭測図班事務員村松氏写之		裏に記。４人（洋服１、中国服３人）
56	人物			１人（中国服）
57	人物			４人（洋服１、中国服３人）

58	人物			１人（中国服）
59	人物			２人（洋服１、中国服１人）
60	人物	明治三十八年六月　従軍中清国奉天城ニテ写ス		裏に記。２人（軍服１、中国服１人）
61	人物	明治三十九年九月　於清国奉天省海龍府署一隅		中国人家族５人（裏に表題に続いて「知府査冨キ（王ヘンに幾）氏」の４人の息子の名を、七男以外記）。劣化大
62	人物			中国服の男女（夫妻？）
63	風景			祭りの行進？
64	風景			上のアップ？の女性たち
65	人物			中国人の子供（下の写真と同一被写体）
66	人物	明治三十八年六月　下院於趙家台陣中写		表題ともども裏に「傍ニ立ニ人？ハ舎主ノ娘ナリ」と記（計２人）
67	風景	THE TEMPLE OF LONG-HWO		建物の前の群衆にウエイト
68	人物		○	弁髪男性の単体。台紙に上海「S.ONOUE」（写真店？）の印字
69	人物	敬呈 遠藤大人殿 清国奉天省南双台子 趙鶴琴贈	○	中国服２人（父子？）
70	建物	台湾舘	○	
71	人物	発？人		裏に記。明治天皇の写真をバックに、中国服の子供３人。以下、84 まで封筒に在中
72	人物			66 と同一
73	人物			中国劇での３人
74	人物			中国劇での単体女性
75	人物			馬車の前の４人（いずれも中国服、うち１人子供）
76	風景			塔の前の馬車と中国人
77	建物			外から見た故宮？
78	人物			家屋の前の４人（いずれも中国服、うち１人少年）
79	人物			家屋の前の３人（いずれも中国服、父と子供２人？ 隠れて見ている者も）
80	人物			中国服の子供２人（姉と弟？）
81	人物			「上海興工公司牛膠総托発所」門の前の４人（洋服３、中国服１人）

82	人物			施設の前の２人（上の写真の人物？）上とも裏に「79」と記
83	風景	拙者御務所へ赴く際玄関乗車の景		裏に記。人力車夫と本人。末尾に「愚妻撮影」と記
84	風景	明治三十八年十一月旅順口見学之時於新市街之ヲ写ス		ビルの前の馬車。表題ともども裏に「撮影者 中村主計 乗車者 岡田参謀 遠藤主計 野沢技手」と記
85	団体			中国の建物をバックに（以下同）、軍人主体に計 26 人（背広姿１人）
86	団体			中国服主体に計 27 人（日本の軍服姿両端に２人）
87	人物	臨時謝図部第二地形図班々長 歩兵少佐 藤阪松太郎君　　同班海龍宿舎々主 滕 桐 君		裏に記。計３人（藤阪氏は中央、滕氏は向かって左端と思われる）
88	人物	日本人が遠藤保雄	○	裏に記。計６人（保雄氏は向かって左から３人目、中国人家族５人とのものと思われる）

各写真（スマートフォンで撮影。一部被写体を損なわない程度でトリミングしたものもあります）

【大内暢三元学長らの写真】

（№1-1 向かって左が大内暢三）

（№1-4 向かって右が大内暢三、中央が近衞篤麿）

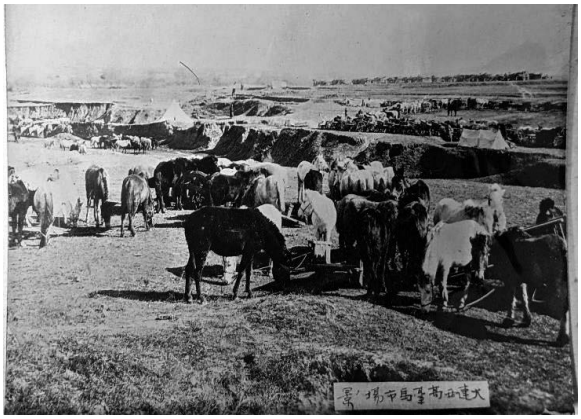
【上海・東亜同文書院の写真】

（№14-40）

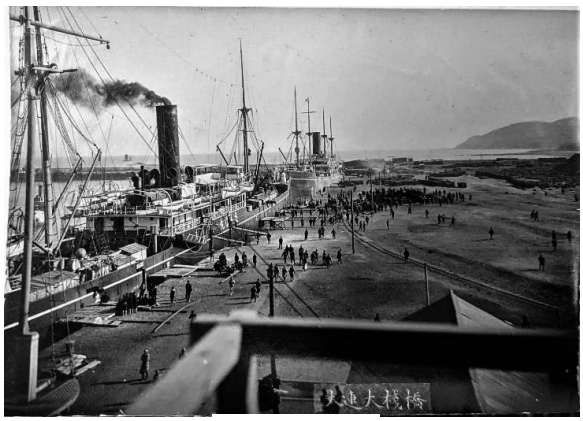
【書院一期生の写真】

（№2 斜めの光は原版から存在）

【大連での写真】



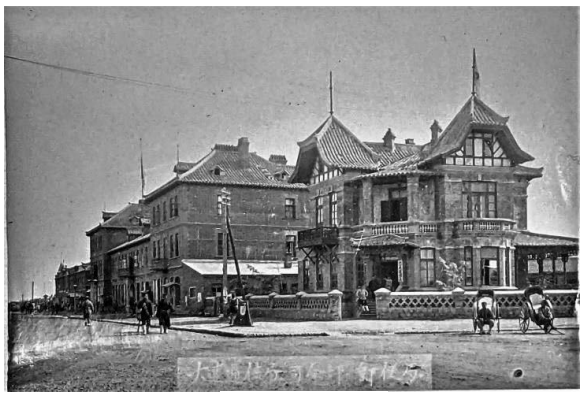
（№14-5）



（№14-6）

（№14-7）

（№14-8）

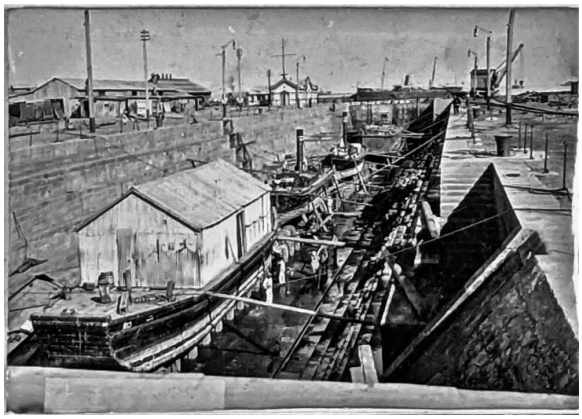


（№14-9）

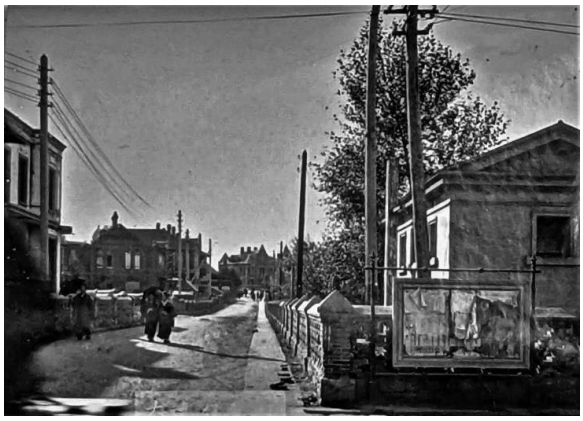
（№14-11）

（№14-12）

（№14-13）



（№14-14）



（№14-15）

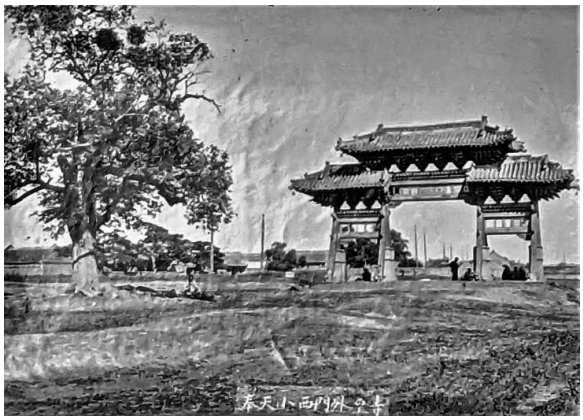
【旅順での写真】

（№14-84）

【奉天（現　瀋陽）**での写真】**

（№14-17）

（№14-21）

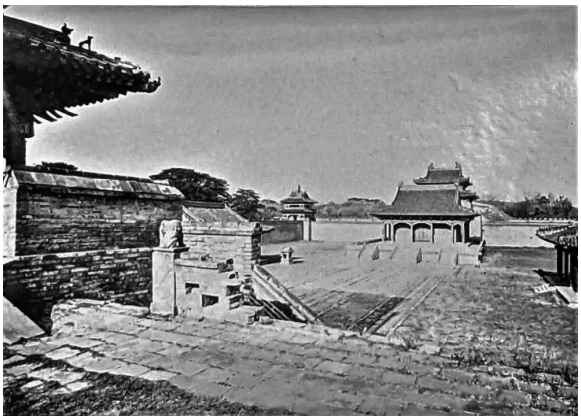


（№14-43）

（№14-44）

（№14-45）

（№14-49）



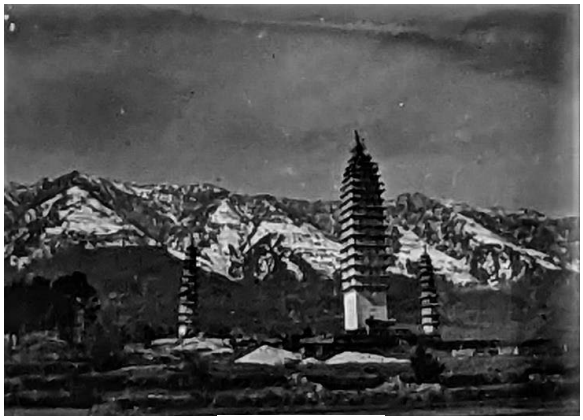
（№14-50）

（№14-51）

（№14-52）

【大理城・府（場所未確定）**での写真】**

（№14-31）



（№14-32）

（№14-33）